

新聞における女性面の復活に関する一考察

— 全国紙三紙の記事分析を通して —

GUO Jie

本論文の研究背景は新聞紙面において女性の読者のみに向けて記事を掲載する欄が創設された時期がある。「育児心得」という記事欄が「婦人欄」に変わり、更により大きな「婦人・家庭欄」に変わり、最終的に「家庭面」紙面の一面に拡大した。一部フェミニズムの影響が見られ、女性を特殊化し、家庭の性役割が強調されているなどという批判の声があったから 2000 年代に全国紙の「家庭面」は「暮らし生活面」と変わった。しかし、2013 年から 2014 年にかけて、全国紙三紙が女性のため、女性に向けた紙面を復活させた。そして三紙のうち二紙『読売新聞』と『毎日新聞』の女性面は、2018 年 3 月と 2017 年 9 月を持って打ち切りになった。なぜ 2013 年後半から各新聞社で「女性面」が作られたのか。また、なぜ打ち切りになったか、さらに、その 4 年間にどのような内容が記載されたのかをめぐって、本稿ではウーマン面の復活と終了の原因を探して研究していきたい。

第 1 章先行研究のまとめについて、ジェンダーという概念の歴史と海外のフェミニズムの関係を明らかにする。ジェンダーという言葉は世界の歴史からどのように生まれてきたのかを述べる。世界のフェミニズムに対し、日本ではどのような動きがあったかについて明らかにする。ジェンダー研究と、メディアとジェンダーの研究が行われた背景を紹介する。メディアとジェンダー研究の歴史、今までの重要な研究成果を紹介する。今まで全般のメディアにおいて、ジェンダー表象問題について、どのような結論があるのか。本研究の位置はどこになるのかを明らかにする。そして、「婦人・家庭面」の歴史と役割を表明する。現在の暮らし生活面の接触状況を見る。最後日本社会のジェンダー秩序とジェンダー意識の状況を明らかにする。

第 2 章は新聞分析である。『朝日新聞』『読売新聞』『毎日新聞』の各新聞の「女性面」について、どのような紙面なのかを整理する。各新聞は女性についてどのようなテーマを扱い、そのなかで女性がどのように表現されているかを明らかにする。方法としては、全国紙 3 紙（『読売新聞』、『朝日新聞』、『毎日新聞』）の縮刷版の新聞紙面を閲覧し、記事のテーマと内容を選出し、テキストを分析する。全国紙三紙の「女性面」の開始時期から今まで、または終了するまでを分析する。（『読売新聞』「ウーマン面」2014 年 4 月から 2018 年 3 月まで、『朝日新聞』「エムスタ」2013 年 9 月から

2020年12月まで『毎日新聞』『おんなのしんぶん面』2013年9月から2017年9月までである。)』

『朝日新聞』の対象はお母さんである。育児はメインであるが、働くママも一部占めている。育児の母としてキャリアの独立の女性として両方とも個性を出しているように見える。母親として、育児以外、自分の個性や幸せに対する強い要望が、「ハンサムマザー」からファッション関係が46%以上になるから見える。子供に全部授けて、自分も犠牲になるような偉大な母親イメージはいなくなつて、自信で強く美しく生きる母親のイメージが見えた。しかしながら、こちらでもう一つ見えたのは、子育てに関する義務は、ほぼ母親が実施している。全体から見ると、育児に関する場面において、父親の登場はほぼいなかった。

『読売新聞』の対象は働く女性のイメージが強く、働く女性のために設置された記事あり、キャリアプランを紹介し、女性支援の対策が良い企業の情報も共有している。育児が働く女性の第一責任だと強調していると言える。育児脅迫調から家庭や育児と仕事の両立脅迫調になる。正規社員のイメージが圧倒的に多い。活躍されている女性モデルは一部自営業、起業する方以外、ほとんど会社の中で成功すると見える。政府の要請に応じて、国の政策を随時に読者に反映し、実行している企業側の情報も素早く読者に提供する。女性活躍、両立、子育て、少子化社会に対応している。

『毎日新聞』の範囲は広く、新しくできたコラムを見ると、若者から見るエッセイ、より年上の女性の気持ち、30代から50代の仕事、家庭、育児などの記事、生きる力で様々な人々の人生を紹介して、生き方のヒントを与える。加藤登紀子、城島、米團治のインタビューは相手の選択、話題の中心、全文が積極的に行動する人である。人生でどのような困難があっても、様々な考え方があって、解決することができる。ゆっくりするコーナーは斉藤由貴、室井滋のエッセイであり、気軽な日々の生活のことが書かれる。西原理恵子のおかんめしと漫画『毎日かあさん』は「おんなのしんぶん」のポイントである。一面の三分の二を占めており、生活暮らしと食べることを重視しているとみられる。明治時代からの婦人欄が家庭面になった際に、家庭面の100年の内容の一つは固定的なテーマ「食べる、暮らす」ことである。

第3章は考察である。全国三紙が同じような時期に女性面を創設する原因は女性活躍推進政策と重要な関係があると推測する。同じ時期に女性面を終了、別入の原因は経団連(日本経済団体連合会)と、WAW!(World Assembly for Women 女性が輝く社会に向けた国際シンポジウム)との緊密な連携があると推測する。「婦人・家庭面」が登場する明治時期と比較すると、背景はそれぞれ違いが、内容についてはほぼ同様である。三新聞社の立場を比較すると、『読売新聞』は政治の足跡とともに随時に反応する。『朝日新聞』は母親を全面的に応援する。『毎日新聞』は女性の精神的面を支援する。メディアとジェンダーで見ると内容は昔の女性に対し、育児の脅迫調、現在は育児と仕事の両立の脅迫調である。フェミニズムから、自分らしくというのは、母親という性役割を透明

2020 年度社会学研究科修士論文タイトル及び要旨

化していくことである。